三日月と待月

陳　　馳

京都大学大学院　人間・環境学研究科　共生文明学専攻
〒 606-8501　京都市左京区吉田二本松町

要旨　三日月は太陽の光を反射する角度により，一ヶ月の中で最初に夜空に出てくる月である．国文学では三日月はなかなか待月と結びつきにくいが，中国では一ヶ月中，全ての月が待月の対象となっているため，中国の漢詩文には三日月の待月は存在する．

平安時代において，三日月の待月の国文学の例は見られないのに対して，漢詩文では，その受容は一時見られるが，やはり広く浸透しなかったのである．その原因は，平安時代において，待月といえば満月以降の月という印象が強すぎたためと考えられる．

しかし，鎌倉時代に入ると，初秋の三日月という表現から派生した，悲秋観を表す待月の例が見られるようになった．さらに時代が下ると，三日月の待月は春の三日月も詠まれるようになって発展を遂げた．ただし，いずれの三日月の待月は，漢詩文の表現と通じる部分があるが，独特な感性が感じられる，日本独自の観月の表現であり，漢詩から受容したものではなかったと言えよう．

は　じ　め　に

周知のように，月は約二九・五日の朔望月の間に，日・地・月の相対位置の変化により，地上に反射する光も日ごとに変わっていき，満ち欠けをしている．様々な月相の中に，三日月は最も早く夜空に現れる月である．『礼記・祭義』[1] 曰く「日出㆓於東㆒，月生㆓於西㆒（日東より出で，月西より生ず）」．地上から見れば，月は日と同じく東から出て，西へ沈んでいく．そして新月は朔日に，日と同時に出ることとなっているが，月から反射した太陽光が地球にほとんど届かないために，見ることが難しく，毎月の三日ほどになってはじめて，月はようやく西側の夜空に細く見えるようになり，そしてすぐ沈んでしまう．それが「月生㆓於西㆒」ということである．月の運行を観察し，暦を作った古代の人にとって，それを知ることは当たり前のことであろう．一ヶ月のうちに最初に現れる月として，三日月は，古代の人々にとって言うまでもなく重要な存在であり，そのほっそりとしてほのかに光る姿は古くから観賞され，また和漢問わず詩歌の素材としても多く扱われており，漢文学では「新月」，「初月」，「微月」，「繊月」などの言葉で，国文学でも「若月」や「片割月」などと名付けられて詠まれていた．

一方，待月とは「月を待つ」という意味の漢語表現であり，また月を眼前にしていない時に，その出現を期待して愛でるという特別な観月でもある．月を待つことは漢詩文においては言うまでもないが，国文学においても古くから存在するものである．月の出は，一般的に満月の時に，日の入と同時に発生し，そして，その出は日ごとに約五十分遅れていく．国文学において，「月を待つ」といえば，一般的に夕闇の後に現れる月，すなわち陰暦の満月以降の月が思い起こされる．例えば，『万葉集』[2] に，

豊前国娘子大宅女歌一首〈未㆑審㆓姓氏㆒〉
夕闇は路たづたづし月待ちていませわが背子
その間にも見む

（『万葉集』巻第四，相聞，七〇九番）

とある．暗闇のせいで路がよく見えないので，月が出てからまた家を出なさいと自分の夫あるいは恋人を引き留め，その間にもう少しだけ相手を見たいと詠んだ歌である．夜の光源である月を待つ古代の人々にとって，これはごく普通の情景であろう．

そういった理由で，国文学では待月は三日月どころか，月前半の月とも結びつきにくいと言える．しかし，漢詩文ではそれは違うようである．それに気づく契機となるのは，「首夏同二諸校正一遊二開元觀一因宿玩レ月」[3]という白居易の詩であった．詩は「清和四月初」と時期を示しながら，「置二酒西廊下一，待レ月杯行遅（酒を西廊の下に置き，月を待ちて杯行すること遅し）」という詩句があり，西の廊下で酒宴を設け，観月するために，月を待っていた場面を描写している．この二句に見られる，西の方向で月を待つというやり方を，前述した三日月の特性と合わせて考えると，この詩の待月の対象は三日月を連想してもおかしくない．少なくとも，夕闇の後に出る月を待っているわけではないことが分かる．

先行研究については，白居易の詩を中心に三日月の特徴を整理した橘英範氏の研究がある[4]．しかし，三日月の待月に言及する研究はやはり管見に入らず，橘氏も研究で「首夏同二諸校正一遊二開元觀一因宿玩レ月」という詩には触れていなかった．白居易の詩が示している待月は本当に三日月の待月なのか，三日月の待月はどういう待月なのか，そして，そのような待月は果たして日本に受容されたのか．以上の疑問点から，本稿ではまず中国における待月の実態を考察し，三日月の待月は如何なるものなのかを明白にする．その上で，日本において，三日月の待月の受容，あるいは類似する表現があるかどうかを探ってみたい．

一，中国における待月という表現

中国の現存の文献では，待月という表現は六朝時代からすでに文学作品に見ることができる．例えば，東晋の王嘉の志怪小説『拾遺記』[5]に，

又有二美女二人，一名二夷光一，一名二修明一，〈即西施鄭旦之別名，〉以貢二於呉一，呉處レ以二椒華之房一，貫二細珠一為二簾幌一，朝下以蔽レ景，夕捲以待レ月，

また美女二人有り，一を夷光と名づけ，一を修明と名づけ，〈即ち西施鄭旦の別名，〉以て呉に貢ぐ，呉処するに椒華之房を以てす，細珠を貫き簾幌と為し，朝下して以て景を蔽ひ，夕捲いて以て月を待つ，

という一文がある．美女の西施と鄭旦は呉国に献ぜられ，后妃の待遇を与えられた．「椒華之房」は「椒房」のことであり，椒房は古代后妃の住居する宮室であり，また后妃その人をも指す．その宮室に珠を連ねて作られた簾を飾り，昼間は日差しを遮るために下ろし，夕方になれば，簾を巻き上げ，月を待って愛でる．文献上待月という言葉は『文選』でも見られないために，『拾遺記』の例は非常に早期のものだと思われる．もし，国文学の思考慣習によれば，「夕捲以待レ月」は夕闇の後に現れる月を待つと誤解されやすいが，実は，中国文学では月齢が不明瞭で，漠然とした表現として現れている待月が大多数であり，『拾遺記』の例もその一つであった．月は夜の時間の最も重要な存在であり，よく夜の代名詞として使われている．したがって，待月も「月を待つ」という本来の意味以外に，「夜を待つ」または「夜になるのを待つ」という派生した意味合いを有している．『拾遺記』の例からもそういった意味合いが窺える．ちなみに，日本にもそのような派生義の受容が見られる．『新撰朗詠集』（「下巻，雑，交友，六八七番」）[6]に収録された小野篁の詩作に，

新斎夜語聞レ鶏起，（新斎の夜の語は鶏を聞きて起く）

旧宅春遊待レ月帰，（旧宅の春の遊びは月を待ちて帰る）

とあり，「待月」は「聞鶏」の対語となり，つまり，待月は「聞鶏」の「朝」に対して，「夜」を意味する言葉として使われている．

ところが，数が少ないが，題や詩句などで日にちが明示されることによって月齢が分かる例ばかりでなく，作品の内容から月齢を判断できるものも存在する．それらの例を分析した結果，中国では夕闇の後に現れる月だけではなく，満月ないし

三日月も待月の対象となっているという事実が分かった．とはいえ，満月，特に八月十五夜の月はその美しさゆえに，夕方からその出を待つというのは理解できなくはないが，月前半の月は夜に入る時に，すでに空にあり，待月を「月の出を待つ」という意味で考えれば，月前半の月は待つ必要がないはずである．

本節では，筆者はまず中国における月齢と関わる待月を，「満月以降の待月」と「月前半の待月」という二種類に分け，それぞれの例を挙げて分析する．

まず，「満月以降の待月」について，管見では，満月も含めて月後半の月を待つのは，その出を待つことであり，漢語表現で言うと「待月出」となる．そのような例は唐代及び唐代以前の詩文の中では，明白に詠まれる例こそないものの，内容から察すれば幾つかの例が見られる．例えば，白居易の「郡楼夜宴留レ客」[7] に，

北客労二相訪一，（北客相訪ふを労ひ）
東楼為一開，（東楼為に一たび開く）
褰レ簾待二月出一，（簾を褰（かか）げて月の出づるを待ち）
把レ火看二潮來一，（火を把りて潮の來るを看る）
豔聽二竹枝曲一，（豔は竹枝曲を聽き）
香伝二蓮子杯一，（香は蓮子の杯を伝ふ）
寒天殊未レ曉，（寒天殊に未だ曉けず）
帰騎且遅廻，（帰騎且く遅く廻れ）

とある．客を引き留めて，銭塘江の潮を観賞したり，楽曲を聴いたりして，一晩中宴会を開く様子が描写されている．第三，四句の「簾を巻き上げて月の出を待ち，灯火を取って潮が来るのを看る」は「東楼」から眺める風景の描写であり，月がまだ出ていない時に，明かりを借りて月の出潮[8] を見る夕闇の情景を表している．そこから待月の時間はやはり宵の間あたりではないかと推測できる．また，宋代に入ると，明白な例が増えてきた．例えば，陳文蔚の「六月十七夜待月」[9] や虞儔の「十七夜待月」[10] などである．

次に，本節の冒頭で言及したように，中国の漢詩文では満月，特に八月十五夜の月の出を待つ例も見られる．その中で，最も注目すべき例は，おそらく元稹が著した唐代伝奇小説「鶯鶯伝」[11] に見えた「明月三五夜」[12] という詩である．

待レ月西廂下，（月を待ちて西廂の下）
迎レ風戸半開，（風を迎へて戸半ば開く）
拂レ牆花影動，（牆を拂ひて花影動く）
疑是玉人来，（疑ふらくは是れ玉人来るかと）

「鶯鶯伝」とは科挙を志す張生と没落した貴族崔氏の娘・鶯鶯との間の恋の物語である．この詩は張生が崔鶯鶯の婢女である紅娘を介して，思いを伝えた後，崔鶯鶯から帰ってきた返事である．張生はこの詩を読んで，鶯鶯が自分を逢引に誘っており，寝室である西廂[13] で自分の訪れを待っていると解読した．一晩鶯鶯と情を交わせると期待していた彼は，二月十五日の夜に垣根を越えて西廂に行った[14]．

この詩に使われた待月は，「月の出を待つ」という理解以外に，またほかの二つの理解がある．一つは既述した「夜を待つ」という意味である．人目を忍んで密会しようとする男女にとって，夜まで待つのは当然のことである．この詩の場合には，十五日夜の月はほぼ日の入と同時に出るので，「夜になる」と「月が出る」はちょうど同時に起こることとなった．

そして，この詩は張生と鶯鶯の逢引の約束を詠む内容なので，「待レ月西廂下」は西廂で張生を待つという意味もある．つまり，待月もまた「待ち合わせの相手を待つ」という意味合いも有している．実際，張生はそのように理解して，西廂に向かっていたのであった．ちなみに，月を待ち人に見立てる待月は日本においては『万葉集』の時代からすでに存在していた．例えば，

闇の夜は苦しきものをいつしかと我が待つ月もはやも照らぬか

（『万葉集』巻七，譬喩歌，一三七四番）

がある．夕闇の後に現れる月を待つと詠んでいるが，実際恋人を待ちわびる気持ちを表しているのである．しかし，中国においては，唐以前ではその表現が見られず，「鶯鶯伝」の「明月三五夜」はおそらくその初見である．ここで「明月三五夜」を前述した白居易の詩と比べて見ると，「明月三五夜」の待月は白居易の「郡楼夜宴留客」とは異なり，観賞の目的で月を待っているのではないということが明らかである．したがって，ここの待月

は，「月を待つ」よりは，むしろ派生義である「夜を待つ」と「相手を待つ」という象徴的な意味の方が強いのではないかと思われる．

一方，「明月三五夜」に対して，純粋に「月を待つ」を意味する例は，許渾の詩作「鶴林寺中秋夜玩レ月」[15] がある．詩に

待二月東林一月正圓，（月を東林に待ちて月正に圓かなり）

広庭無レ樹草無レ煙，（広庭樹無く草煙無し）

とあり，まさに八月十五夜の月を待つ場面が描写されている．拙稿「平安時代における八月十五夜の観月の実態」[16] で論じたように，八月十五夜詠は，元稹が活動していた中唐から徐々に盛んになり，そして許渾が活動していた晩唐になると，「中秋」という言葉は「八月」という意味から，徐々に「八月十五夜」を意味するように変化して，ますます浸透していった．さらに晩唐から北宋にかけて，「中秋の観月」が庶民化した結果，「中秋節」が成立したのである．そして，満月の待月も中唐では元稹の例以外，管見に入らず，それ以降徐々に増え，特に宋代に入ってから多数見られるようになった．それにより，満月に対する待月の意識は八月十五夜の観月と共に，展開していったとも考えられる．

最後に，月前半の待月は一体どういうことだろうか．既述したように，月前半の月，特に上旬の月は日が沈む前に，すでに夜空に昇り，その出を待つ必要はないはずである．にもかかわらず，月前半の月を待つ例が存在するということは，その待ち方は「日の入以降に現れる月を待つ」とは異なることを示している．

月前半の待月の明白な例は唐詩においては見出すのは容易ではないが，宋代に入ると，詩の内容を探らなくても，詩題だけで分かる例がすでに幾つも存在する．例えば，張嵲の「六月初八日過二龍洞一納二涼樹陰下一酌レ泉待レ月而行」[17] や王庭圭の「八月十四夜彦和置レ酒待レ月遇レ雨」[18] などがある．中でも王庭圭詩の冒頭に「君方置レ酒待二月明一（君まさに酒を置きて月明らかなるを待たんとす）」という詩句があり，「月が明るくなるのを待つ」ことを物語っている．管見では，上旬の月は空が完全に暗くならない限り，美しく輝くことができないために，月前半の月を待つことは，まさに「月が明るくなるのを待つ」ということではないかと考えられる．漢語表現で言うと「待月明」となる．ほかの明白に「待月明」が使われた類例はまた郭印の「五月十二日晩登二平云亭一得二平字斉字一」[19] の「倚レ杖聴二僧語一，窺レ檐待二月明一（杖に倚り僧語るを聴く，檐を窺ひ月明らかなるを待つ）」という詩句がある．

ただし，ここで注意すべき点は，「待月明」は唐詩にも見られるが，「月明」は「月が明るい」以外に，月そのもの，あるいは月明かりとも解釈できるということである．詩に月前半の月を詠んでいると明言しない限り，判断することは難しい．例えば，許渾の詩「将帰二姑蘇一南楼餞二送李明府一」[20] に「前期迢遞今宵短，更倚二朱闌一待二月明一（前期迢遞として今宵短く，更に朱闌に倚りて月明を待つ）」とあり，「待月明」という表現が用いられているが，「今宵短」という言葉から，待っているのはむしろ十五日以降の月ではないかと思われる．したがって，「待月明」の詩は一概に月前半の待月とは言えないのである．

以上により，筆者は中国の待月を整理してみた．中国の漢詩においては，一ヶ月中のすべての月齢の月が待月の対象である．満月以降の月を待つことはその出を待つ「待月出」であり，また月前半の月を待つことはその明るくなるのを待つ「待月明」である．ただし，三日月の待月はその二種類の待ち方とも若干異なる，非常に特別な例である．本節では，月前半の待月の例は主に宋詩を挙げたが，内容から推測できる唐詩の例は，三日月の待月も含めて，もちろん存在する．三日月の待月の実態を探るには，月前半の待月の例から三日月の待月を特定しなければならない．したがって，それについては後節でさらなる詳しい分析をしたい．

二，三日月の待月の実態

本節では，三日月の待月の実態を考察してみたい．「はじめに」で言及したように，三日月は宵の口に西方の夜空より現れて，そしてすぐ沈んでいくという性質がある．それにより，三日月の待月はまず，ほかの月前半の待月と同じく，もともと

夜空に存在する新月が明るくなるのを待つ「待月明」であり，また同時に，朔日から見えなくなった月が再び夜空に出るのを待つ「待月出」でもあると考えられる．その明白な例は唐代においてそう多くないが，内容から割り出せる例は幾つかある．まず，「はじめに」で言及した白居易の「首夏同二諸校正一遊二開元觀一因宿玩レ月」に注目しよう．全詩は，

我與二二三子一，（我と二三子と）
策名在二京師一，（策名して京師に在り）
官小無二職事一，（官小にして職事無く）
閑二於為レ客時一，（客と為る時よりも閑なり）
沈沈道觀中，（沈沈たる道観の中）
心賞期在レ茲，（心賞期する茲に在り）
到レ門車馬迴，（門に到りて車馬迴り）
入レ院巾杖隨，（院に入りて巾杖隨ふ）
清和四月初，（清和四月の初）
樹木正華滋，（樹木正に華滋す）
風清新葉影，（風は清し新葉の影）
鳥恋残花枝，（鳥は恋ふ残花の枝）
向レ夕天又晴，（夕べに向んとして天又晴れ）
東南余霞披，（東南余霞披く）
置二酒西廊下一，（酒を西廊の下に置き）
待レ月杯行遲，（月を待ちて杯行すること遲し）
須臾金魄生，（須臾にして金魄生じ）
若下與二吾徒一期上，（吾が徒と期するが若し）
光華一照耀，（光華一たび照耀して）
楼殿相参差，（楼殿相参差たり）
終夜清景前，（終夜清景の前）
笑歌不レ知レ疲，（笑歌して疲るるを知らず）
長安名利地，（長安名利の地）
此興幾人知，（此の興幾人か知る）

とある．『新釈漢文大系』の注釈[21]は，この詩は満月を賞翫していると解釈している．その根拠となったのは，おそらく満月を指す「金魄」という表現と，その「清景」が「終夜」続いていたことである．しかし，その解釈は「清和四月初」という詩句とは明らかに矛盾している．「金魄」は確かに満月を詠む詩にしばしば見られるが[22]，本来満月だけの別称ではなかった．白居易の自著の類書『白氏六帖事類集』（巻一，月第四）に「蟾蜍〈瑶兎，蟾光，蟾輝，素月，蟾魄，素娥，円魄，金魄，素光，月名〉」とあり，「金魄」はほかの「月名」と並べられているが，満月とは言っていない．『康熙字典』[23]曰く「魄者，形也，謂二月之輪廓無光之所一名レ魄也」，つまり「魄」とは月の輪郭があるが，光が反射していない部分のことである．また『礼記』（郷飲酒義第四十五）に「譲之三也，象二月之三日而成レ魄一也」[24]とあり，月は三日に「魄」が生じたと語っている．言い換えれば，月は三日月として現れ，その輪郭が見えるようになると同時に，「魄」も生じた．この文章は『白氏六帖事類集』にも記されており[25]，当時の文人の一般的な知識だと見てよかろう．「魄」は本来輝かない月の部分を意味していたが，月の出現と「魄」が共に生まれたということからなのか，いつの間にか月の一般的な別称の一つになってしまったと考えられる．そして，「金」と呼ばれる理由は，おそらく月は西の空から現れるものだからと考えられる．中国の五行思想の中では，西は金を代表する方向であるので，西の空より生じる月は「金魄」と呼ばれるのも当然のことであろう[26]．

とはいえ，「金魄」は必ずしも満月を意味するとは限らないということが分かったが，「置二酒西廊下一，待レ月杯行遲」と詠んでいるこの詩は西の空から現れる月を待っているのだろうか．三日月は西の空から現れるが，ほっそりとした姿ですぐ沈んでしまう．しかし，その性質は「光華一照耀，楼殿相参差」と詠まれる場面とは一致していない．三日月は弱い光しか有していないため，そこまで楼殿を照らすことができないのである．この詩で詠まれる月は少なくとも半月以降でなければならないが，それはまた「清和四月初」という詩句と矛盾しているように見える．実は「月初」は「月の初め」という理解以外に，また上旬という意味もある．中国では一ヶ月を「月初」，「月中」，「月末」に分けており，月初から十日までの日付は「〇月初〇日」と称されている．前節で言及した，宋代張嵲の詩「六月初八日過二龍洞一納二涼树陰下一酌レ泉待レ月而行」はまさにその呼び方を使っている．したがって，この詩で賞翫された月を，半月から十日までの間の月とするのが妥当であろう．この時期の月は夜明けまでは空に残らないが，その前の深更にまだ見えるはずであり，「終夜の清景」と

詠むのは誇張の部分が認められるが，不合理とまでは言えないと思われる．

白居易の詩は「西廊で月を待つ」と詠んでいるが，ほかの詩句の内容から見れば，その待月は西の空に現れる三日月を待つのではなく，三日以降の明るくなるのを待つ「待月明」の例である．では，ほかの類似する例はどうであろう．例えば，李白の「挂二席江上一待レ月有レ懐」[27] に，

待レ月月未出，（月を待ちて月未だ出ず）
望レ江江自流，（江を望みて江自ずから流る）
倏忽城西郭，（倏忽として城西の郭の）
青天懸玉鉤，（青天玉鉤を懸く）
（後略）

とある．月を待っていたが，月はずっと出なかった．江を眺めているうちに，月は突然城の西郭の夜空に現れた．「玉鉤」は細い月の喩えであり，よく漢詩文で見られる表現である．南北朝鮑照の「玩二月城西门廨中一」[28] にも「始出二西南楼一，纖纖如二玉鉤一（始めは西南楼より出で，纖纖として玉鉤の如し）」と，玉鉤のような三日月は最初は西から出て，ほっそりとして玉鉤のようだと詠んでいる．同時代なら，白居易の「八月三日夜作」[29] の「草頭珠顆冷，楼角玉鉤生（草頭珠顆冷かに，楼角玉鉤生ず）」にも見られる．ただし，三日月のみならず，弓張りの半月より細い月が全部「玉鉤」と呼ばれているようである．例えば，李賀の「七夕」[30] の「天上分金鏡，人間望玉鉤（天上金鏡を分ち，人間玉鉤を望む）」という詩句に，七夕の半月に対しても「玉鉤」の表現が使われている．李白のこの詩には日にちを示す言葉が見当たらず，加えて，もし月齢の変化を知らなければ，この詩は曇から出てくる月を待つと誤解することもあり得る．しかし，「青天（晴れ渡る空）」という言葉が使われている以上，玉鉤が晴れてから現れるものではないと判断できる．したがって，李白のこの詩には日にちを表示する言葉がないものの，詩の内容を正確に理解すれば，この詩で詠まれる月は夕方の頃に西方の夜空に突然現れる細い三日月だと判断できよう．

また，明白な例として，劉禹錫の「三月三日與二樂天及河南李尹一奉二陪裴令公一泛レ洛禊飲各賦二十二韻一」[31] が挙げられる．詩に，

川色晴猶遠，（川色晴れてなほ遠き）
烏声暮欲レ棲，（烏声暮れて棲まむと欲す）
唯余踏青伴，（ただ余（のこ）る踏青の伴）
待レ月魏王堤，（月を待つ魏王堤）

とあり，三月三日の上巳節の夕方に三日月を待つ場面を詠んでいる．題に三月三日と直接日にちを提示してるため，詩は西方の夜空に現れる三日月の待月であり，李白の詩よりもっと明白な例であることが分かる．「魏王堤」は「魏王池」の北の大堤であり，唐代の洛陽の名所である．「魏王堤」は風光明媚であり，観月にふさわしい場所でもある．劉禹錫と白居易をはじめとする当時の名士が，そのような名所で，三日月の出を待って愛でるのは，三日月の待月は当時相当広まっていたと言っても過言ではなかろう．

三，三日月の待月の類例と受容

「はじめに」で述べたように，日本においては，待月といえば一般的に満月以降の，夕闇以降に出る月のことが思い起こされる．前文で挙げられた『万葉集』の二首の歌（七〇九番・一三七四番）はその典型的な例である．平安時代においては，そういった「待月出」の表現は，また平安時代の女性貴族が，約束を守らない思い人を，待つ月と比較するという趣旨の歌に多く見られる．その代表的な例は，おそらく素性法師の「今こむといひしばかりに長月のありあけの月をまちいでつるかな」（『古今和歌集』巻十四，恋歌四，六九一番）という歌であろう．ほかの表現なら，例えば定家に，

建保五年四月庚申に春夜
山のはの月まつ空のにほふより花にそむくる春のともし火

（『玉葉和歌集』巻第二，春歌下，二一一番）

という歌がある．歌は月光に映える花を愛でるために灯火を後向きにすると詠んでおり，月が主役ではないが待月の表現が使われている．建保五年の四月庚申は四月十四日[32] であり，時期的には月前半の待月の例であるが，題詠であるので目の前の風景を詠んでいるとは限らない．また「山のはの」という言葉からはやはり「待月出」の例だと判断できる．

そして，待月＝「待月出」という認識は日本の漢詩文でも例外ではないようであり，待月の表現を使う漢詩文の多数はやはり「待月出」の例である．例えば，『懐風藻』[33] に収録された境部王の「五言，秋夜山池，一首」に，

忘レ皈待二明月一，（皈りを忘れて明月を待ち）
何憂二夜漏深一，（何ぞ夜漏の深きを憂へん）

という詩句があり，宴会を楽しむあまり，帰ることを忘れ，明月を待つのであれば，夜が更けてしまっても，心配することはないのだと，夜更けに出る月を待つ場面を描いている．

ちなみに，『菅家文草』には，「八月十五夜，月亭遇レ雨待レ月，探レ韻得レ无」[34] や「八月十五夕，待レ月，席上各分二一字一，得レ疎」[35] という，八月十五夜の待月に見える例も存在している．しかし，内容を確認すれば，確かに満月に対する観賞の意識が認められるものの，本質的に夜空が晴れて，曇から出る月を待つ場合の例である．月齢に関する待月ではないので，本稿では論じる対象としない．

では，そういった状況の中で，三日月の待月の類例や受容などは本当に見られないのだろうか．後文では，それを考察してみたい．

まず，日本の漢詩ではどうであろう．現存の平安時代の漢詩を探ると，一例しか管見に入らなかった．それは『中右記部類紙背漢詩集』[36] に収録された，治暦三年三月三日の，「酔来晩見花」を題とされた作文の，大江匡房の詩作である．詩に，

三日春闌属二晩陰一，（三日春闌なり晩陰に属し）
見レ花酔裏好二清吟一，（花を見る酔裏清吟を好くす）
窓梅賞レ眼催レ灯飲，（窓梅は眼に賞で灯りを催がして飲み）
岸柳寄レ眸待レ月斟，（岸柳は眸を寄せ月を待ちて斟む）
（後略）

とあり，夕方の時刻に暗くなりつつも，梅花を愛でながら，酒宴を張っていた参加者の様子を詠んでいる．詩に直接は言っていないが，対岸の柳は恐らく西の方向であり，そちらに目を向け，柳の間に三日月が現れるのを待ち，現れたらまた酒を酌んで飲む．前文に言及した白居易の「待レ月杯行遅」という詩句とは，異曲同工に感じられるのである．

この作文のほかの作品に待月という言葉はないが，月に触れた詩句はまだ二ヶ所ある．まず，藤原良基の詩に「晴風面緩粧遮レ眼，新月眉開色染レ心（晴風面緩み粧は眼を遮り，新月眉開き色は心に染めり）」とあり，三日月が現れることを「眉が開く」と喩え，その月色は印象深いと詠んでいる．さらに，源時綱の詩に「沈湎猶望霞暗地，開眉更対月生林（沈湎して猶望む霞の暗き地，開眉して更に対ふ月の生ずる林）」とある．酔い潰れても，まだ暗くなりつつある晩霞を眺めていた．三日月が林の間に現れたら，ますます目を逸らさずに，月を愛でることにする．明言していないが，詩は読む人に，夕陽が沈むことから，三日月が沈むことを想起させ，同じ美しくも長く続かない景色を惜しませている．それによって，当時の貴族は確実に三日月の性格を把握しており，匡房の三日月の待月は形だけのものではなく，確実に漢詩文における三日月の待月を享受して創作されたものと思われる．しかし，それでも三日月の待月は広まらなかった．もちろん，現存しなかった詩文の中にまだ存在していたかもしれないが，やはりほかの待月と比べたら圧倒的に数が少ない．その原因は，国文学の中では，待月といえば満月以降の月という印象が強すぎるからではないかと考えられる．

では，国文学において，本当に三日月の待月の例は見られないのであろうか．筆者は平安時代の作品を探ったが，やはり管見には入らなかった．ただし，鎌倉時代以降の作品からはいくつか類例が確認できた．例えば，貞永元年（一二三二）に成立した『洞院摂政家百首』に，藤原家隆の歌，

待ちそめて雲間に出づる三日月も秋のひかりはそへはじめけり

（『洞院摂政家百首』秋，早秋五首，五三五番）

があり，待ちはじめてやっと三日月が雲の合間に現れ，秋の光を添えはじめたと詠んでいる．月は日本において秋の景物であり，その最初の月は七月の初の三日月となり，「三日月を待つ」を詠むのを通して，これからの本格的な秋が待ち遠しいことを意味している．「三日月は一ヶ月で最初に現れる月である」から発想したという点では漢詩文の

待月と通じている部分はあると思われる．また，藤原家隆の家集『壬二集』にも，

古今一句をこめて，秋の歌よみ侍しに

秋はまづ心づくしにまちそめているかげしたふみかづきのそら

（『壬二集』，二〇一四番）

という類例が見られる．「心づくし」という言葉は「悲秋」の趣旨を語っており，そして秋が最初に人を「心づくし」にさせるのは，待ちに待った三日月がようやく出てきたのに，すぐその沈んでいく様を惜しまなければならないことにある．同じく初秋の三日月の待月が見られる歌であるが，『洞院摂政家百首』の例はその出に注目しているのに対して，『壬二集』の例はその入りに重きを置いている．さらに，この歌の詞書にも注目する必要がある．詞書に記された「古今一句」とは恐らく『古今和歌集』に収録されている，

題しらず

よみ人しらず

このまよりもりくる月の影見れば心づくしの秋はきにけり

（『古今和歌集』巻第四，秋歌上，一八四番）

という歌であり，家隆は明らかにこの歌を本歌取りにしている．木の間より漏れてくる，月の光が見られるようになると，それは人を悲しませる秋がとうとう来てしまったと詠んでいる．木の葉がはらはらと落ちる木々の間に隙間が生じ，そこから漏れる月の光に情緒を覚え，「心づくし」のきっかけとなった．しかし，『古今和歌集』の配列を見ると，この歌は一八二番の源宗于の「なぬかの夜のあかつきによめる」という詞書を持つ歌と，一八三番の壬生忠岑の「やうかの日よめる」という詞書を待つ歌の次に配列されている．つまり，七日の歌と八日の歌の後に配列されたこの歌は，三日月を詠んでいるとは考えがたく，八日以降の夕月を詠んでいると考えた方が妥当であろう．とはいえ，その趣旨は紛れもなく初秋のものであり，またそういった「早秋」あるいは「初秋」に対する詠み方は，『古今集』の時代にすでに存在しており，そして，家隆の時代にも，影響が及んでいた．例えば，同時代の，『玉葉和歌集』に収録された西園寺実氏の歌に，

早秋の心を

常磐井入道前太政大臣

秋のきてけふみか月の雲まより心づくしのかげぞほのめく

（『玉葉和歌集』巻第四，秋歌上，四六一番）

とあり，やはり同様な趣旨で類似する表現の歌が見られる．家隆の三日月の待月もまさにそこから派生した表現である．ただし，『古今集』の歌及びその類例は，やはり消極的な印象が強く，自ら進んで初秋の三日月を待つどころか，仕方がなく初秋の三日月の到来を受け入れるしかないという心情も読み取れなくもない．それは家隆の，秋の到来を期待して初秋の三日月を待ち，そしてその早い入を惜しんで悲しむ心情とは，やはり本質的に異なるのではないかと思われる．家隆の歌はちょうど，その変化を物語っている．

少し時代が下ると，『風雅和歌集』にも類例が見られる．正親町公蔭の歌，

初秋露を

権大納言公蔭

秋きてはけふぞ雲まにみか月のひかりまちとる萩のうは露

（『風雅和歌集』巻第五，秋歌上，四五三番）

とあり，上の句は実氏の歌の表現と類似し，下の句は擬人法を使用し，三日月の光を待ちとろうとしている露を詠んでいる．月露は典型的な秋の景物であり，それを使って三日月の光が露に映ることを秋の到来の象徴と見なし，人の秋を待つ心情を描いている．

さらにもう少し時代が下ると，肖柏の『春夢草』にも類例が見られる．

三月の三か月

初秋の空に待ちみしかげもあれど花の木のまのけふの三日月

（『春夢草』中，春歌上，八二七番）

花かづらながき日ぐらし待ちいづる空にぞかすむけふのみか月

（『春夢草』中，春歌上，八二八番）

初秋の三日月を

風の音露の哀もそれながら秋を待ちとるみか月のかげ

（『春夢草』中，秋歌上，一一〇九番）

一一〇九番は前文で挙げた例と同様に,「初秋を待つ」を趣旨とする三日月の待月の例であるが,八二七番はその表現を享受してさらに発展させた例である．肖柏は初秋の三日月を比較対象とし,三月の満開の花の木の間に見えてくる三日月を詠んでいる．ところが，八二八番には少し異なる表現が見られる．歌は花蔓をして春の長い一日を楽しんでいたところ，月を待ち受けていた夕方の空に三日月が霞みつつ現れてきたという場面を描写している．そして，詞書の「三月の三か月」からは,自ずと上巳が連想される．ちょうど，曲水宴と花蔓が詠み合わされる家持の歌,

漢人も筏浮べて遊ぶといふ今日ぞ我が背子花蔓せな

（『万葉集』巻第十九,四一五三番）

があり，肖柏はそれを参考にしたのではないかとも考えられる．もしそうだとすると，この歌は第一節で挙げた劉禹錫の「三月三日與二樂天及河南李尹一奉二陪裴令公一泛レ洛禊飲各賦二十二韻一」とは通じるところがあり，共に上巳を背景とする三日月の待月となるのである．とはいえ，曲水宴がどこまで意図されていたかは不明であり，また肖柏には漢風の意識があるかどうかはわからないが,この歌は「花かづら」をはじめとする表現を介して,やはり和風の情緒を表しており，漢詩文の受容とは言えないのである．

以上の三日月の待月の例を見れば，国文学における三日月の待月は，まず秋の訪れを描写するための存在であり，それは漢詩文に見られる，月を愛でることを趣旨とする表現とは異なるもので,また初秋の三日月に限られていた．ただし，時代が下ると，その表現は発展する傾向が見られ，肖柏の歌によれば，春の三日月も待月の対象となった.そういった三日月の待月は，漢詩文とは通じる部分はあるが,漢詩文から受容した表現ではなく,日本独自の観月の表現だと判断してよかろう．

お　わ　り　に

三日月はもともと夜空に存在する新月が，太陽の光を反射するようになってから,三日ほどに,西の夜空に現れた月であり，また地上の人から見れば，三日月の月は，月が新月になり見えなくなってから，一ヶ月の中で最初に出てくる月でもある.したがって，三日月の待月は「待月出」と「待月明」，両方の性格を有する特殊な「待月」である．

漢詩文では，ほかの月齢が不明瞭な「待月」と違い，三日月の待月は唐代では，明白に詠まれていた例がすでに確認できる．一方，平安時代の漢詩文では，その受容は一時見られるが，やはり広く浸透しなかった．その原因は，平安時代において，待月といえば満月以降の月という印象が強すぎたためと考えられる．そして，国文学においても，やはりその原因により，三日月の待月は見られなかったのである．

しかし，鎌倉時代に入ると，初秋の三日月という表現から派生した待月の例が見られるようになった．もともと悲秋観を表すため，秋の到来が受け入れがたいと詠まれた表現は，待月の導入により，秋の到来を楽しみに待つことを意味するようになった．さらに時代が下ると，三日月の待月は春の三日月も詠まれるようになって発展を遂げた．ただし，いずれの三日月の待月も，漢詩文の表現と通じる部分があるが，独特な感性が感じられる，日本独自の観月の表現であり，漢詩から受容したものではなかったと言えよう．

注

1）楊天宇著『礼記訳注』(上海古籍出版社，二〇〇四年).

2）本稿の和歌の引用については，私家集の引用は『新編私家集大成　CD-ROM』（エムワイ企画，二〇〇八年）による．それ以外は『新編国歌大観』（ジャパンナレッジ，二〇一八年より公開）による．なお,『万葉集』の引用については，便宜のために，私に漢字を当てた.

3）平岡武夫・今井清編『白氏文集歌詩索引』下冊「白氏文集歌詩篇（那波本　陽明文庫蔵)」(同朋舎，一九八九年)，詩番号〇一七八.

4）橘英範「三日月と白居易」『中国文史論叢』第五号（中国文史研究会，二〇〇五年).

5）四庫全書薈要・乾隆御覽本六五『論衡・拾遺記』(吉林人民出版社，一九九七年)，子部，第一五冊,巻三.

6）柳澤良一注釈『新撰朗詠集全注釈』（新典社,二〇一一年).

7）『白氏文集歌詩索引』（前掲)，詩番号一三三〇.

8）夜の潮の満ち干は大体,月の出時刻の前後一～二時間頃が満潮になり,南中時刻の前後が干潮と考

えることができる．

9） 北京大學古文獻研究所編『全宋詩』（北京大學出版社，一九九一年）第五一冊，第二七一七卷陳文蔚四，三一九七〇頁．

10） 『全宋詩』（前掲）第四六冊，第二四六三卷虞儔二，二八五二〇頁．

11） 『太平広記』（中華書局，一九六一年）巻第四百八十八，雑伝記五．「鶯鶯伝」はまた「会真記」とされ，原題は「伝奇」であり，『太平広記』に収録された時，「鶯鶯伝」と改題された．そして，「鶯鶯伝」は元代の王実甫により雑劇『西廂記』と改編され，元雑劇の代表作となっている．

12） この詩の作者は定かではない．『全唐詩』に収録された時，崔鶯鶯を作者とされ，題は「答張生（一作明月三五夜）」とされている．『全唐詩』（中華書局，一九九九年）第十二冊，巻八〇〇崔鶯鶯，九〇九六頁．

13） 中国では，「廂」は寝殿造りの「廂」の意味と異なり，北に在る「正房」に対して，東西に在るのは「廂房」という．したがって，この詩句は西に向かって月の出を待つという意味に取れない．実際，その解釈は常識にも反している．

14） 原作では，張生は西廂に着いた後，紅娘を起こして取り次がせると，服装に一糸の乱れも見られない，厳しい顔づきの鶯鶯が現れた．鶯鶯は自分はわざと「鄙靡之詞」で，張生が来るように仕向けたのであると言い，その目的は張生の行為を非難することにあった．しかし，張生の行動は「明月三五夜」の内容と食い違いがあり，恐らく鶯鶯の真意ではないとされている．元稹は詩の真意を明かしていなかったので，後世において様々な説が見られる．王実甫の『西廂記』では，鶯鶯は張生が自分の詩の意味を勘違いして行った行為に怒り，それで気が変わってしまったと改編している．

15） 『全唐詩』（前掲），第八冊，巻五三四許渾，頁六一四二．

16） 拙稿「平安時代における八月十五夜の観月の実態」『歴史文化社会論講座紀要』（京都大学大学院人間・環境学研究科歴史文化社会論講座，二〇一八年），三～五頁．

17） 『全宋詩』（前掲）第三二冊，第一八三七巻張嵲二，二〇四五五頁．

18） 『全宋詩』（前掲），第二五冊，第一四七五巻王庭圭二四，一六八五九頁．

19） 『全宋詩』（前掲），第二九冊，第一六六八巻郭印七，一八六八〇頁．

20） 『全唐詩』（前掲），第八冊，巻五三五許渾，頁六一五五．

21） 新釈漢文大系『白氏文集』（明治書院，二〇〇七年）二上，巻第五．

22） 例えば李白の詩「古風」（『全唐詩』〈前掲〉第三冊，巻一六一李白一，一六七四頁）に「円光虧中天，金魄遂淪沒（円光中天に虧け，金魄遂に淪沒す）」とある．

23） 四庫全書薈要・乾隆御覽本『御定康熙字典』（吉林人民出版社，一九九七年），經部・第二四～二五冊．

24） 楊天宇著『礼記訳注』（前掲）．注釈によれば，魄は月光が強い時に，まったく見えない状態となっているが，月光が弱くなる晦日の前の三日，あるいは朔日の後の三日にだけ，見えるようになる．『礼記』は主賓の間の謙譲の義をその現象に喩えた．

25） 古典研究會叢書，漢籍之部四〇～四二『白氏六帖事類集』（汲古書院，二〇〇八年），巻一，月第四に「三日成レ魄〈郷飲酒義，三譲象二月三日而成レ魄一」とある．

26） 宋代真徳秀が編集した『文章正宗』（〈臺灣商務印書館，一九八三年〉第一三五五冊，集部二九四）巻二十二下詩に，李白の「古風」（前掲注22）に「月生二於西一，実金方，故曰二金魄一」という注釈が見られる．

27） 『全唐詩』（前掲）第三冊，一八〇巻李白，一八四五頁．

28） 銭仲聯増補集説校，中國古典文学叢書『鮑参軍集注』（上海古籍出版社，一九八〇年）巻六，頁三九二．

29） 『白氏文集歌詩索引』（前掲），詩番号三二七八．

30） 『全唐詩』（前掲）第六冊，三九〇巻李賀，四四〇七頁．

31） 『全唐詩』（前掲）第六冊，三六二巻劉禹錫，四一〇二頁．

32） 『拾遺愚草』に収録されたこの歌の詞書（二一七〇番）は「建保五年四月十四日，院にて庚申五首，春夜」である．

33） 辰巳正明著『懐風藻全注釈』（笠間書院，二〇一二年）．

34） 日本古典文学大系　七二『菅家文草』（岩波書店，一九六六年）巻一，十二．前文に挙げた王庭圭の「八月十四夜彦和置レ酒待レ月遇レ雨」にも「遇レ雨」という言葉があるが，第二句の「便有二微云一薄二太清一（便ち微云有りて太清に薄る）」という詩句と合わせて考えれば，詩人はもともと「待月明」をするつもりであるが，雨に遇ってしまった．『菅家文草』の，観月の夜に，雨に遇ってしまったので，晴れてから出る月を待つという例とは，因果関係が異なるのである．

35） 同右，巻一，三九．「八月十五夕，待レ月，席上各分二一字一，得レ疎」は詩の内容を確認する必要がある．詩に，

一更待レ月事何如，一更月を待つこといかん，
疑是遥旻月歩徐，疑はくはこれ遥なる旻（あまそら）に月の歩びの徐きならむか，
為向二東頭一千万報，為（かるがゆゑ）に東の頭（ほとり）に向ひて千たび万たび報ぐ，
白雲雖レ密意猶疎，白雲は密しといへども意はなほし疎なり，

二更待レ月事何如，二更月を待つこといかん，
不レ見二金輪一度二碧虚一，金輪の碧虚（あをぞら）を度ることを見ず，
雨脚忿々（そうそう）雲簇々（そうそう），
秋風為レ我可二乖疎一，秋風我がために乖き疎むずるなるべし，

三更待レ月事何如，三更月を待つこといかん，
目倦心疲望裏疎，目倦み心疲れて望みの裏疎なり，
酒是十巡詩百詠，酒はこれ十たび巡り詩は百たび詠ず，
怪来不レ照二我閑居一，怪来（あやし）まくは我が閑居を照さざること，

四更待レ月事何如，四更月を待つこといかん，
鐘漏頻移意有レ余，鐘漏頻に移りて意余り有り，
縦使精光纔透出，縦使精光纔に透り出づとも，
当勝二徹夜甚簷疎一，当に徹夜甚簷（じむえん）の疎きに勝らむ，

五更待レ月事何如，五更月を待つこといかん，
物色人情計会疎，物色と人情と計会すること疎なり，
不レ恨雲中天已暁，恨みず雲中天已に暁になれることを，
応知陰雨我三余，まさに知るべし陰（くもり）と雨とは我が三余なりといふことを，

とあり，一更から五更まで夜空が晴れるのを待つ内容に違いない．

36）中村璋八・伊野弘子訳注『中右記部類紙背漢詩集』「中右記部類巻十」（汲古書院，二〇一一年），四八番．

Mikazuki and Machitsuki

CHEN Chi

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

Summary The crescent moon（Mikazuki）is regarded as the first moon in the night sky in a lunar month depending on the angle of reflection of the sunlight. It's hard to link the crescent moon to Machitsuki（literally translated as waiting for moon）in Japanese Literature, but it exists in Chinese Literature. All the phase of the moon can be called as waiting moon in Chinese Literature.

"Waiting for the crescent moon" couldn't be found in Japanese Literature during the Heian Period, despite it was accepted temporarily in Chinese prose and poetry which was written by the aristocrat of the Heian Period. However, it didn't spread widely in Japan. The reason is considered that the poet in the Heian Period thought "Only the moon after full moon can be called as waiting moon" inflexibly.

However, "Waiting for the crescent moon in early autumn" was used to represent the view of sorrow on autumn which could be found in the Kamakura period. Later on, "Waiting for the crescent moon" was used in Waka（poem）of spring. On the other hand, although the two expressions of "Waiting for the crescent moon" have the close meaning to the expressions of Chinese prose and poetry, the two expressions were used in Japanese style and represent the aesthetic and unique sense of Japanese. Therefore, they were not accepted from Chinese prose and poetry.